

『万用不求算』の謎 The Mysteries of *Man'yofukyuzan*

鈴木武雄
Takeo Suzuki*

Abstract

“Man'yofukyuzan(万用不求算)” has many mysteries.

1. When comparing the wasan book with both “Jinkoki(塵劫記)” and “Jugairoku(豎亥録)”, it is very unique in point of its purpose and form.
2. On this book ○ as vacancy(空位) appeared for the first time in history of wasan. This ○ as vacancy was very epoch making, and later leading wasan books, for example “Sanzo(算俎)”, “Samopofutudankai(算法勿憚改)” and “Katsuyosampo(括要算法)” adopted ○ as vacancy.
3. A writer of this book is unknown. Even in the early years of Edo period, writer's names were written clearly except “Sanyoki(算用記)” owned by Ryukoku University and Tenri University.
4. “Man'yofukyuzan(万用不求算)” presents us a new mystery of circumstance on publication of publisher(書林板元).

This monograph will make the mystery clear by mentioning the relation between commercial publication appeared in Kyoto on early Edo era and wasan books.

Received Nov. 29, 2016.

2010Mathematics Subject Classifications :

Key Words ; Man'yofukyuzan, Mistery, Vacancy(空位)○, Publisher(書林板元)

* 掛川市教育センター ; KAKEGAWA City Education Center, 620 Mitumata Kakegawa Shizuoka 437-1416, Japan. e-mail:pk755733@da2.so-net.ne.jp

§ 1. 先行研究

1. 1896 年(明治 29 年)遠藤利貞『大日本数学史』(p.61)。本書の寛永二十年の項に「万用不計算は算法を知らざる者の為に編したるものなり。すなわち某数の二割より九十九半割に至れる諸数を列記し、以てそのくらいを進退して、大いにその用を博うせり。故に、算法を求めずして、これを得。これを以て万用不計算と曰う。編者姓名を記さず。坊間の一小冊に過ぎざれども、蓋し、早割数一覧速知の書、ここにはじまれり。」とあります。

2. 1954 年(昭和 29 年)藤原松三郎『明治前日本数学史；第 1 巻』(岩波書店, pp.232-234)。本書では万用不計算の目次と内容を説明しています。末尾に「潮汐、知死期を記すところは改算記にもある」とし、『改算記』への影響を記しています。

3. 1960 年(昭和 35 年)遠藤利貞原著・三上義夫編・平山諦補注『増修日本数学史』(厚生社恒星閣, p.63)。本書は前書 1 と本文は同じである。頭注に平山が「万用不計算には、寛永二十年八幡屋八郎兵衛と寛永二十一年安田十兵衛の二種がある」と記しています。

4. 1990 年(平成 2 年)下平和夫『江戸初期和算書解説』(研成社, pp.31-33)。本書では『万用不計算』について 3 頁に及ぶ解説がある。重要な点は「江戸初期の和算書で『万用不計算』ほど系統のはっきりしないものはない。」としています。

5. 1991 年(平成 3 年)吉田政美(校注)『万用不計算』(江戸初期和算選書, 第 2 巻, 研成社)。本書の各所に細かく註があるが、総括的な解説はありません。

以上のように、和算史研究書では『万用不計算』について、本格的な研究というものはありません。むしろ注目されず研究対象とならなかったというべきです。

6. 2010 年(平成 12 年)板倉聖宣「日本(中国・朝鮮)におけるゼロの概念とその記号の歴史」(*『数量的な見方考え方』(仮説社)所収)。本書は、初期の和算書においてゼロ 0 に相当する記号について網羅的に調査し、『万用不計算』に初めて空位の○が出現することに言及しています。尚、朝鮮と中国の算書についても空位の○について調査しています。(*本書は神戸大学の三浦伸夫教授の御教示によります。)

§ 2. 和算史上における『万用不計算』

和算史上における『万用不計算』の位置を確認しておきましょう。寛永末年(1644 年)までに出版された和算書は下記のように年表にすると少ないことが分かります。

1. 1600 年(慶長 5 年)頃 龍谷大学所蔵『算用記』(著者不詳)*古活字板
 2. 1622 年(元和 8 年)『割算書』(毛利重能)*整版
(*1622 年(元和 8 年)『諸勘分物』第二卷(百川治兵衛)*稿本)
 3. 1627 年(寛永 4 年)三卷本『塵劫記』(吉田光由)*整版
 4. 1628 年(寛永 5 年)天理大学所蔵『算用記』(著者不詳)
 5. 1629 年(寛永 6 年)頃 五卷本『塵劫記』(吉田光由)
 6. 1631 年(寛永 8 年)三卷本『塵劫記』(吉田光由)
 7. 1631 年(寛永 8 年)再版本『割算書』(毛利重能)
 8. 1631 年(寛永 9 年)『塵劫記』(吉田光由?, 中野市右衛門刊行)
 9. 1634 年(寛永 11 年)四卷本『ちんかうき』(吉田光由)
 10. 1639 年(寛永 16 年)『堅亥録』(今村知商)
 11. 1640 年(寛永 17 年)『因帰算歌』(今村知商, *荒木利兵衛及び柳地七右衛門開版もある)
 12. 1641 年(寛永 18 年)小型三卷本『塵劫記』(吉田光由)*遺題本
 13. 1641 年(寛永 18 年)『新編塵劫記』(著者?, 安田十兵衛開板)
 14. 1641 年(寛永 18 年)『諸算記』(正次, 川崎屋忠兵衛)*百川忠兵衛
 15. 1643 年(寛永 20 年)三卷五十六條本『新編塵劫記』(著者?, 西村又左衛門板行)
 16. 1643 年(寛永 20 年)正月 『万用不求算』(著者不詳, 開板八幡屋八郎兵衛)
 17. 1644 年(寛永 21 年)正月 『万用不求算』(著者不詳, 安田十兵衛)
 18. 1644 年(寛永 21 年)正月 『万用不求算』(著者不詳, 中野是誰)
- *この間、10種ほどの和算書がある
- *. 1659 年(万治 2 年)『改算記』(山田正重, 中野氏道伴刊行)

§ 3. 『万用不求算』の概要

『万用不求算』は、それまでに出版された『塵劫記』『堅亥録』などと発想、構成に至るまで全く異なる和算書です。例えば『塵劫記』は、1. 大きい数として「一、十、百、千、万、億、兆、京、……、無量大数」、2. 一より小さい数として「両、文、厘、毫、絲、……」、3. 一石よりうちの小数「斗、升、合、……」、4. 田の数の名「町、反、畝、歩、……」、5. 九九の事、6. 八算の事、のような順序で書かれています。

しかし、『万用不求算』には、このような記述は一切ありません。それどころか、『塵劫記』などの八算(*二一天作五のような割算九九)を覚えることを批判して「算勘にたつせさる人の用ハたゝす」と序文に記しています。

実際に上巻の目次には、1. 銭のさん(*算)をしる事、2. 米のさんをしる事、3. よろつ目をしる事、4. 枡のつもり(*積)の事、……、8. しをとき(*潮時)をしる事、9. ちしこ(*知死期)をしる事。以上のように、当時の商売や生活に必要な計算を簡便に知る方法を記しています。

下巻の目次には、1. 百めより九百めを二つにわり(*割)たる時、2. かけざん高をしる事、3. きぬはふたへのさんをみる事、4. 米のそうはをみる事、5. 百めより九百めを二つ半にわりたる時、6. 百めより九百めを三つにわりたる時、7. 百めを九百めを三つ半にわりたる時、……、百めを九百めを九十九にわりたる時、百めを九百めを九十九半にわりたる時。となっています。以上のように下巻では、 $N \div 2 = \text{商と余り}$ 、 $N \div 2.5 = \text{商と余り}$ 、……、 $N \div 99 = \text{商と余り}$ 、 $N \div 99.5 = \text{商と余り}$ を書き連ねた和算書になっています。ようするに数表にし、必要な被序数と序数を何所にあるか調べれば、計算をしなくても商と余りが分かるというものです。そのためか本書はポケット版の大きさになっています。

更に若干の解説をしましょう。例えば、上巻の最初、銭のさんをしる事(*本文；銭のそうは(*相場)の事)の最初は「銭壹貫文を銀十匁のとき銀壹匁につき八十七文二ぶ七リン〇三」となっています。1貫文＝1000文ですから、計算は $1000 \div 11 =$ となります。しかし、実際に計算してみますと商＝90.9余り0.01となります。本書にある商＝87.27余り0.03となりません。この理解の根本には江戸時代初期の商業習慣を知る必要があります。すなわち、寛永通宝のように中に穴の開いた銭は紐を通して流通していました。そのとき、9

60枚の銭を紐(*^{さし}緋)に通してあれば1貫文と勘定していました。これを「九六勘定」「九六銭」といいました。(*藤本隆士『近世匁銭の研究』(吉川弘文館, 2014年, pp.264-268), 三井高維編述『新稿両替年代記關鍵』(岩波書店, 2刷1995年, 1刷1932年・1933年))このように江戸時代初期の商業上の習慣を織り込んで計算がなされていて、ある意味でとても実用的な和算書と言えます。

また、この最初の計算で、余りに「〇三」のように空位の〇が出現します。その後の計算でも、必要に応じて「二〇五」「〇〇五」のように空位の〇が出現しています。

§ 4. 空位の〇についての謎

『万用不求算』が和算史上において最初に空位に〇を使用したのでしょうか。何故ならば、それ以前の代表的な和算書である『塵劫記』では空位は下と令で、『堅亥録』では零や令です¹。たしかに空位の〇は中国や朝鮮の算書に出現しま

¹ 龍谷大本『算用記』の空位は「の」で、『割算書』は「下」、『諸勘分物』では「欠」、天理大本

す。例えば『弧矢弦算術』(*1552 年序文)、『測円算法』(*1553 年序文)、『詳明算法』(*1373 年?)には空位の○があります。(*任繼愈主編『中国科学技術典籍通彙, 一二』(河南教育出版社, 1993 年)の所収の算書を参照)『詳明算法』は朝鮮に伝わり銅活字板で復刻されて、日本へも伝わり国会図書館と内閣文庫にあります。しかし、『塵劫記』や『堅亥録』では空位に○を採用しなかったのです。『算法統宗』(*1597 年編著)では空位は零です。『算学啓蒙』(*1299 年撰)では算木表現のところに○がありますが、数値表現のところに空位の○を見付けることはできません。この『算学啓蒙』は朝鮮へ伝わり世宗(*1397-1450)のころ銅活字版で復刻され、それは日本へも伝来しました。現在筑波大学所蔵で養安院(*曲直瀬正琳)の印があるものです。(*児玉明人編『十五世紀の朝鮮刊 銅活字版数学書』(無有奇庵双刊, 1966 年))また、この『算学啓蒙』は、1658 年(万治元年)『算学啓蒙訓点本』(久田玄哲, 京都田原仁左衛門刊)、1672 年(寛文 12 年)『新編算学啓蒙注解』(星野実宣, 江戸村上平楽寺刊)、1690 年(元禄 3 年)『算学啓蒙諺解大成』(建部賢弘, 洛陽書肆柳枝茨木方道蔵版)として研究されてきたことは周知のことです。

『万用不求算』の空位の○に中国や朝鮮の算書の影響はあるかもしれませんが、それよりも重要なことは空位の○を選択したことです。それは空位を漢字の下、零、令などではなく、○という記号の重要性に気付いていたのです。この空位の○は位取記数法におけるゼロ「0」とほぼ同等の役割をしています。もちろん『万用不求算』で余りを○・○3などと表現していませんから、空位の○が現代的な算用数字のゼロ「0」と一致するとはいえませんが、余りの「○3」は単位を考えると妥当な表現です。いずれにしろ、『万用不求算』に空位の○を採用したことは、その後の和算書へ大きな影響を与えました。1659 年(万治 2 年)『改算記』(山田正重, 中野氏道伴刊行)に「四百○五坪」「一二○七一」などと自在に空位の○を使っています。この『改算記』は非常に普及したので、その影響は大きかったと言えます。1663 年(寛文 3 年)『算俎』(村松茂清, 西村又右衛門開板)で、とりわけ重要な円周率の数値では空位の○を使っています。1673 年(延宝元年)『算法勿憚改』(村瀬義益, 日比谷横丁亀屋開板)でも空位の○は随所に使われています。1712 年(正徳 2 年)『括要算法』(関孝和遺著, 皇都五條通扇屋町 川勝五郎右衛門等)でも円周率の数値表で空位の○が使われています。これらの和算書は和算史上非常に重要ですから、その影響は大きかったと言えます。

『算用記』では「下」、『諸算記』では「欠」になっている。更に 1652 年刊『新刊算法起』では空位は「令」「超」、1653 年(1664 年再刊)『参両録』では「零」、1657 年刊『円方四卷記』では「令」、同年刊『算元記』では「令」、同年刊『格致算書』では「零」「令」、1659 年刊『算法闕疑抄』では「令」になっている。『万用不求算』と 1659 年刊『改算記』との間の和算書で空位の○はないと思われる。『江戸初期和算選書』(研成社)を参照させていただいた。尚、必要に応じて原著を参照した。

§ 5. 『万用不試算』の書誌及び書林板元

1. 『万用不試算』の所在

現在のところ、『万用不試算』の刊本は5本、写本が1本が知られています。

①国立国会図書館書蔵；寛永二十年正月吉日。開版烏丸通松原下町 八幡屋八郎兵衛

②東北大学附属図書館林文庫；同上

③東京理科大学下浦文庫；同上。但し本書の末尾の下部が破れ書林板元名なし。

④東北大学附属図書館岡本文庫；同上の写本

⑤東北大学附属図書館林文庫；寛永十一年正月吉日 安田十兵衛版

⑥筆者所蔵；寛永十一年正月吉日 中野是誰版。本書の形状は縦 15.5 cm，横 11.2 cm，序文 1 丁，本文 127 丁(*上下合本)，表紙は栗皮色表紙で、書き題簽(*栗皮色表紙は、江戸時代初期の和本の特徴)。

2. 『万用不試算』の書林板元(*版元)

一般的に江戸時代の出版物で書林板元が書かれているものと、書かれていないものがあります。和算書も同じで、吉田光由自身が出版した『塵劫記』には書林板元名がありません。逆に、書林板元がある『塵劫記』は吉田光由に無断で出版したものと思われます。

『万用不試算』の出版事情には、いくつかの謎があります。寛永 20 年版は八幡屋八郎兵衛と書かれています。現在調査したところ、八幡屋八郎兵衛という書林板元で出版した書物は『万用不試算』しかありません。(*岡雅彦等編『江戸時代初期出版年表』(勉誠出版，2011 年)，『近世書林板元総覧 改訂増補』(青裳堂，1998 年)。静岡県立中央図書館が調査をしてくださった。) 一方、安田十兵衛と中野是誰は、仏書や古典籍を多数出版して現存しています。すなわち、八幡屋八郎兵衛は本職の書林板元でないかもしれないのです。これは八幡屋八郎兵衛の住所京都烏丸通松原下町にもあります。近世初期京都の書林板元は寺町にありました。それは商業出版の始まりである京都の書林板元は、仏教寺院で必要な仏書の出版事業から出発したからです。これが日本における商業出版のはじまりです。それまでの書物は書写するか、あるいは寺院が出版するか、個人(権力者)が出版するかのいずれかでした。江戸時代になって出版が商業的に成り立つようになったのです。いずれにしろ出版は、活字印刷にしろ、整版印刷にしろ、原稿、活字あるいは版木、彫り、刷り、製本綴じ、販売という非常に手間と費用がかかるものです。『万用不試算』の印刷を考えますと、合計 128 丁ですから、版木を両面彫りしたとしても 64 枚も必要です。筆者はある和算書の版木を所蔵しています。この版木の厚さは 1.5 cm ほどですが、版木の両端に取っ手がありそ

の厚さは 4.5 cmほどあります。そこで 64 枚の版木の厚さは全部で 288 cmにもなります。1 冊の書物の版木の置き場所だけでも、広い場所を必要とするのです。版木の材質は桜の木が多かったようです。64 枚の版木は相当高価であったと思います。さらに彫り師と刷り師、製本綴じ師の賃料及び販売の費用を合計すると著者に支払う原稿代はそれほど高くなく、著者よりも書林板元の権限が大きくなります。以上のような事情を考えますと、八幡屋八郎兵衛は書林板元とするならば不思議な存在で謎です。八幡屋八郎兵衛という書林板元名も変わっていて本名を隠すためかもしれません。これは『算法勿憚改』の書林板元「日比谷横丁 亀屋開版」に似ていて謎です。しかも『万用不求算』の著者名は書かれていません。序文で『塵劫記』などを批判して独自の和算書を書きながら著者名を書かなかったのも謎です。一番の謎は、八幡屋八郎兵衛が寛永 20 年に『万用不求算』を板行しましたが、その翌年寛永 21 年に安田十兵衛と中野是誰が同書を出版したことです。3 書を比較しますと全く同じ書体で同じ彫りです。3 書の板元のある最終頁を比較しますと、明らかに「寛永二十年 八幡屋八郎兵衛」という板元名と出版年を削り埋め木をして、新しく「寛永二十一年 安田十兵衛」、「寛永二十一年 中野是誰」と彫り直したと思われます。そうした場合、八幡屋八郎兵衛は安田十兵衛と中野是誰に版木を売却したことになります。版木を売却しない場合、『万用不求算』の綴じ紐を切り 1 枚 1 枚ばらし、それを新しい版木に張り付けて彫り出版した可能性もあります。それにしても初期和算書で翌年 2 つの別々の書林板元から同じ版木で板行した例は少ないと思います。これも謎です。

書林板元安田十兵衛の住所は、洛陽(*京都)三条寺町誓願寺前と他の書物(*『万葉集』(寛永貳拾年蠟月吉日))にあります。ところで、安田十兵衛は、1641 年(寛永 18 年)『新編塵劫記』を板行しています。安田十兵衛が和算書の出版に興味関心を持っていたことになります。それが『万用不求算』を板行した動機かもしれません。

中野是誰は、近世初期京都における代表的な書林板元である中野一族の一人です。中野一族は、京都左京区田中門前町(*京都大学・数理解析研究所の西隣)にある百万遍知恩寺内の塔頭の一つ了蓮寺に過去帳が残されています。御住職によりますと、了蓮寺はもともと寺町(*元下京区新京極通錦街)にありましたが、1890 年(明治 23 年)になって現在地に移転したとのことです(*伊藤祐晃・塚本善隆『浄土宗史の研究(論文)』(1937 年))。そのためか墓石は不明になり、後に中野市右衛門(即中道伴)の記念碑が建てられています。御案内とお話をして頂いた了蓮寺の御住職伊藤泰昭様に感謝申し上げます。中野一族の出版物については、日下幸男編『中野本・宣長本刊行集成』(龍谷大学仏教文化研究所個人報告書<2003 年度>, 2004 年)に詳しく書かれています。中野一族の過去帳などは、安藤武彦

『齋藤徳元研究』(和泉書院, 2002 年, pp.631-647)に掲載されています。過去帳で中野是誰は「寛文九己酉 安明是誰居士 九月六日 本屋市左衛門父」と記されています。また同年「寂洞円照信女 七月十七日 本屋是誰娘」とあり、是誰の娘が同年の少し前に死去したことまで判明します。また、「貞享元年 智淵妙鑑大姉 十一月四日 本屋市左衛門母」とありますから、この人物は中野是誰の妻です。さらに「延宝三年庚申 栄菴貞春信女 六月二日 本屋市左衛門妻」ともあります。これほど江戸時代初期の書林板元一族の戒名から没年まで判明することは稀です。

この中野一族の代表的な人物は、中野市右衛門(道伴)です。この過去帳の冒頭の張り紙に「即中道伴居士 寛永十六年四月六日 中野道也兄也」とあることから中野市右衛門(道伴)が中野一族の代表的な人物であることを示しています。この中野市右衛門は多くの仏書や古典籍を出版しました。単にそれだけでなく、中野市右衛門は日本における最初に商業出版を成立させた人物であったことです。それゆえ、過去帳には中野という姓ではなく「本屋」と書かれていることから、当時の京都における存在が分かります。その中野市右衛門は 1632 年(寛永 9 年)『塵劫記』を板行しています。これは吉田光由に無断で板行した可能性があります。さらに、1659 年(万治 2 年)中野道伴は『改算記』(山田正重著)を板行しています。この中野市右衛門(道伴)は 1639 年(寛永 16 年)に死去していますから、二代目中野道伴と思われます。ここからは憶測です。二代目中野道伴が『改算記』を板行した理由が推測されます。それは初代中野市右衛門が 1632 年(寛永 9 年)『塵劫記』を板行したとき、吉田光由及び吉田角倉家からクレームがあったと思われます。そこで二代目中野道伴は、『塵劫記』を批判して、新たに『改算記』を板行したのです。塵劫記への批判は『改算記』の序文に「夫世間に行るゝ塵劫記といふ算書を見るに事わづらはしくして相違のみおほし」とあることです。最大手の書林板元であった中野一族の肝いりで出版しただけに『改算記』は、『塵劫記』と並ぶほどベストセラーとなり、その後も 1687 年(貞享 4 年)『改算記綱目』(持永豊次・大橋宅清著, 大文字屋 西村七郎兵衛開版, 五条通高倉東江入町)や 1720 年(享保 5 年)『頭書改算記綱目大成』(江都書林松葉軒)、1764 年(明和元年)『大増補改算記綱目大成』(東都奥村蔵)等々として何度も出版されました。(* 平山諦「塵劫記及び改算記目録」東北数学雑誌 vol.45(1939 年),pp.377-404)

§ 6. まとめ

『万用不求算』は他の和算書と比較して特異な内容です。和算書(数学書)というよりも、被序数、序数、商、余りを記した簡便で実用的な数表書と言えます。いずれにしろ『万用不求算』の余りに空位の○を和算史上初めて使用したのは、

画期的なことです。『塵劫記』では空位が下と令で、『豎亥録』では零と令という漢字文字に対して○という記号にしたことです。それゆえか、空位の○はその後の有力な和算書『改算記』『算俎』『算法勿憚改』『括要算法』などに継承されました。空位の○は算用数字のゼロ「0」とほぼ同等の役割（*位取記数法）を果たすことができ、幕末明治に西洋数学・算用数字・筆算は容易に受け入れられ広く浸透することができたとも言えます。これは数学史上及び数学教育史上でも非常に重要なことです。それにしても『万用不求算』が空位の○を使用したのかは、大きな謎と言えます。

文献

- [1]安藤武彦著『齋藤徳元研究』(和泉書院, 2002 年)
- [2]板倉聖宣著「日本(中国・朝鮮)におけるゼロの概念とその記号の歴史」(*『数量的な見方考え方』(仮説社,2010 年)所収)
- [3]井上隆明編『近世書林板元総覧 改訂増補』(青裳堂, 1998 年)
- [4]遠藤利貞著『大日本数学史』(1896 年)
- [5]遠藤利貞原著・三上義夫編・平山諦補注『増修日本数学史』(厚生社恒星閣, 1960 年)
- [6]岡雅彦等編『江戸時代初期出版年表』(勉誠出版, 2011 年)
- [7]日下幸男編『中野本・宣長本刊行集成』(龍谷大学仏教文化研究所個人報告書 <2003 年度>, 2004 年)
- [8]児玉明人編『十五世紀の朝鮮刊 銅活字版数学書』(無有奇庵双刊, 1966 年)
- [9]下平和夫著『江戸初期和算書解説』(研成社, 1990 年)
- [10]任繼愈主編『中国科学技術典籍通彙, 一二』(河南教育出版, 1993 年)
- [11]平山諦著「塵劫記及び改算記目録」東北数学雑誌 vol.45(1939 年),pp.377-404
- [12]藤本隆士著『近世匁銭の研究』(吉川弘文館, 2014 年)
- [13]藤原松三郎著『明治前日本数学史; 第 1 卷』(岩波書店, 1954 年)
- [14]三井高維編述『新稿両替年代記關鍵』(岩波書店, 2 刷 1995 年, 1 刷 1932 年・1933 年)
- [15]山崎與右衛門著『塵劫記の研究; 図録編』(森北出版, 1977 年)
- [16]吉田政美(校注)『万用不求算』(江戸初期和算選書, 第 2 卷, 研成社, 1991 年)

補遺. 書林板元と和算書

書林板元と和算書の関係を考察しましょう。江戸時代初期において出版事業が商業的に成り立つ以前は、有力者(*豊臣秀頼、徳川家康)による個人出版あるい

は寺院出版などでした。『塵劫記』は吉田光由個人及び角倉家が後援して出版したと思われます。角倉素庵がいわゆる『嵯峨本』を連彫活字などで印刷し出版したことは近世初期の文化史上画期的な出来事でした。それだけ角倉家と出版事業は密接な関係がありました。1641年(寛永18年)小型三卷本『塵劫記』(吉田光由)遺題本の序文に「有人算法の道をしらすしてただ利のために我書を求版に開き 朱にて書字も墨となす是大成あやまりなり」とあり、著者に無断で出版した『塵劫記』の存在を記しています。いわゆる偽版(海賊版)のことです。筆者は書林板元のある『塵劫記』こそが偽版と推測しています。1643年(寛永20年)三卷五十六条本『新編塵劫記』(著者?, 西村又左衛門板行)について、山崎與右衛門『塵劫記の研究; 図録編』(p.342)で「この版にか杜撰な誤刻が随所にかなりある」として書かれていることから、吉田光由に無断で出版したいわゆる偽版といえます。1631年(寛永9年)『塵劫記』(吉田光由?, 中野市右衛門刊行)と1641年(寛永18年)『新編塵劫記』(著者?, 安田十兵衛開板)もいわゆる偽版と思われます²。山崎與右衛門『塵劫記の研究; 図録編』(p.342)に「様式は序、漢文の三卷本にもとづいて、これに四卷本の小型版、および十八年の三卷本の遺題本の内容をとりいれ、殊に後者の挿絵を多数挿入して編集しているところに特長がある。これより以降の塵劫記の諸版はこの版に典拠しているものが多い。」と書林板元の影響力の大きさを記しています。

いずれにしろ『万用不求算』は、1643年(寛永18年)八幡屋八郎兵衛が板行し、翌年に安田十兵衛と中野是誰が板行しています。安田十兵衛板と中野是誰板は、八幡屋八郎兵衛板と同じ板木を使用しているので偽版というより再版と言えます。また、『万用不求算』の出版は著者名もなく書林板元が主導したと言えます。その後、『新刊算法起』(田原仁左衛門)、『九数算法』(桂六左衛門)、『参両録』(武村三郎兵衛)、『新編諸算記』(川崎屋忠兵衛)、『円方四卷記』(板元なし)、『格致算書』(西沢太兵衛)、『算元記』(東井吉辰)、『新編算学啓蒙』(田原仁左衛門)、『四角問答』(梨本述右衛門)、『算法闕疑抄』(村瀬三郎右衛門)とほとんどが書林板元から出ています(*書名と書林板元)。書林板元主導は1659年(万治2年)『改算記』(山田正重, 中野氏道伴刊行)によって更に大きな影響を及ぼすことになりました。

² 米澤誠「塵劫記の謎」『木這子』(東北大学附属図書館, Vol.28.№3(2003年))は、東北大学所蔵の塵劫記を比較検討し、真正版は寛永8年版と寛永11年版だけで、それ以外の版は偽版としている。

《史料 1》

八幡屋八郎兵衛版と中野是誰版及び安田十兵衛版の大尾の比較



